

# バラ(Rose)解説書



恋を誘う

～アンチエイジング～

「バラは、人類の前にその姿を現したときから、その尋常ならざる美しさで人間を虜にしてきた」とはフォークナーの言葉である。

人間はこの世に生まれてくるとき、何も携えず裸で誕生する。誕生の後に銀の匙が待ち受けている幸福な赤ん坊もいれば、そうでない場合もある。

しかし、植物はこの世に生まれてくるとき、すでに自らが携えている。なかでも、バラはその誕生の瞬間から、考えうる最高の美と威厳をそなえていたのではないか。

人類がいつどこで、どのようにしてバラと遭遇したか知るよしもないが、バラほど愛され、多くの神話と伝説に彩られた花は他にない。

文明の始まるはるか古代から今日に至るまで、どの花よりも多くの権力者やその妃たちを魅了し、芸術家や文学者にインスピレーションを与えてきたのである。

ギリシャ神話は、愛と美の女神をバラとともに誕生させた。エジプトの女王クレオパトラは、バラの花びらを寝室に敷き詰めてローマの覇者を迎えた。ナポレオンの皇后ジョセフィーヌは、世界で最初の本格的なバラ園を持ち、バラの画家を育てた。

ピンクのバラをこよなく愛したのはマリー・アントワネットだった。

英国の「バラ戦争」は、ランカスター王家(赤バラを紋章としていた)と、ヨーク家(白バラを紋章としていた)の内戦だった。

芸術家も負けていない。シェイクスピアはハムレットの恋人オフィーリアを「5月のバラ」と呼び、古代ギリシャ最大の女流詩人サッフォーは、バラの香りを「恋のため息」と詠った。

しかし、バラの真に魅力的なところは、歴史に残る人たちや芸術家の特

権ではなく、ごく平凡な人々の心にも愛と喜びを与えることだ。

初めて恋をした少年が、最初に花を贈るとしたらバラをおいてほかにないのではないか。

バラは愛の証なのである。貧しいアパートの一室も、1輪のバラで明かりが差し込んでくる。

そんな、バラの花に、近頃もうひとつの特権が加わった。

バラが美肌と老化防止に効果があるというのである。

バラは昔から女性ホルモンの分泌や自律神経、血液循環などに影響があるといわれてきた。

高級香水や化粧品に使用されるバラの精油は、おもにダマスカローズとモロッコローズの2品種である。(他の品種では、香りの含有量がわずかすぎて採算がとれないのである)

成分は300種以上もあり、その化学構成は非常に複雑だといわれている。代表的な成分は、ゲラン酸、ネロール、ゲラニオールなどである。それらは、収斂作用や皮膚の弾力回復作用に優れている。

ほかにも、バラに含まれるモノテルペンアルコール類には、抗菌作用や免疫力を高める作用が、セスキテルペンアルコール類には、抗菌、抗炎症、敏感肌、加齢に伴って突入する成熟肌のシワ・たるみを遅らせるというのである。

また、最近の実験によって細胞再生能力を早めることもわかってきた。皮膚の表面にテープを貼ってはがし、人工的にダメージを与えたとき、どのくらいの時間で回復していくかというものである。そのとき、バラの匂いをかいだ者は、かがなかった者よりも回復が早く、その差は1時間30分～3時間のあいだで顕著に現れたというのである。

ほかにも、心理的なストレスなどで影響を受ける皮膚が、バラの鎮静効果によってバランスを取り戻していくことも、脳波や心拍数を測る実験でわかっている。

かつて「25歳はお肌の曲がり角」という有名なコマーシャルがあった。それは加齢にしたがって皮膚細胞の交替速度も落ちてきて、そのピークが25歳だということだ。

人は誰でも年をとり、皮膚の弾力が落ちてシワ・シミが現れ、顔から若さが失われていく。誰もその日を免れることはできないけど、こうした現象は一挙に現れるわけではない。

また、個人差も大きい。あれよあれよと老けてしまう人も、かなりの高齢になるまで若々しさを失わない幸運な人もいる。

しかし、老化を遅らせることはある程度人為的にできるのである。老化は健康や生活習慣、環境に大きく作用される。

適切な運動や食事、暮らせるだけの経済的基盤、親しい家族や友人の存在、おしゃれに気を配り、恋をしたり、旅行をしたりなど、自分のリウムにあった生活をしていけば、いくつになっても魅力を失うことはないだろう。

日々のお手入れ次第で肌の張りやつやに大きな格差は生じてくるのだ。皮膚組織は大まかにいって3つの層に分かれている。表面にあるのが表皮(角質層)で、一番外の肌である。その下には、新しい細胞を作り出す真皮がある。3番目が皮下組織で、脂肪組織が皮膚全体を支えている。

加齢だけでなく、手入れを怠っていると皮膚の表面に汚れや死んだ細胞の蓄積が長くなり、見た目にも肌の張りやつやのないくすんだ顔になってくる。それは真皮で作られた新しい細胞と死んだ細胞が入れ替わるサイクルの遅れが原因とも言われている。

若いときは、新しい細胞がつぎつぎと生産され、表皮の死んだ細胞に取って代わるから、肌がなめらかでしっとりとしているのだ。

「女性はどれだけ忙しくとも、顔と身体を美しく保つよう心がけなければならない。それは、見た目の美しさと同時に、意識の上でも美しくなるためである」とは、アメリカの化粧品ブランド、エスティーローダーの創始者の言葉である。

おしなべて大まかなアメリカ製品の中で、エスティーローダーは珍しく基礎化粧品にこだわってきた。彼女の伯父が皮膚科の専門家というバックグラウンドがあったからだろう。そして、老齡の彼女の美しさはそのまま広告塔である。

バラのもうひとつの重要性は、香りと作用である。バラには相反する2つの香りが同時に含まれている。清潔な爽やかさと甘い官能で、鎮静作用と催淫作用をもたらす。

バラの香り成分は、脳内モルフィネと呼ばれる $\beta$ -エンドルフィンやエンケファリンと化学構造が似ているといわれている。

バラの香りが鼻腔を伝わって脳の中樞である視床下部に達すると、ドーパミンが分泌され、幸福感や満足感が得られるというのだ。さらに、脳の $\alpha$ 波が増え、呼吸がゆっくりと落ち着いてきて、精神的に安定するのである。それは、興奮して、やがて満足すると快い眠りに落ちる性行為に似ている。

バラの花は美しいだけでなく、香りが脳に影響して人間の本能的な欲望を刺激するのではないか。

「薔薇がしおれるまえに、薔薇の冠を戴こう。われらの一人として、この官能の悦楽に身をひたさぬことのなきよう、われらの喜びのしるしをいたるところに記しておこう。それこそわれらに与えられたもの、それこそわれらの定めなのだから」とは、旧約聖書「知恵の書」の抜粋である。

ギリシャ神話もまた、恋が仕事だった愛の女神ヴィーナスをバラの象徴としていた。古代の人々は、美と官能を秘めたバラの本質を見事に見抜いていたのだ。

そして、現代の香水調香師たちは、特上の顧客の香水にバラの精油を惜しみなく注ぎ込み、恋の誘惑に手を貸している。

香りは、脳内の中枢にダイレクトに入っていく、理性のコントロールを受けにくくさせ、全身に影響を及ぼす。無差別の恋こそが若さを保つ秘訣だと彼らは密かに思っているにちがいない。

歴史的な天才調香師のうちのひとり、ジャン・パトウが開発した「ジョイ」は目の玉が飛び出るほど高いが、本物のブルガリア酸のバラを10%も使用している。

30mlの壺に28ダースものバラのエッセンスが閉じ込められているのである。

また、同じく有名なフランソワ・コティの創作した「シプレ」は、匂いのついた水を純粹芸術にまで高めたといわれている。それは、天然原料を主体にしながらも化学合成を取り入れ、バラ園のバラよりもバラらしく、こうであろうという抽象的な思考を香水に再現したからである。

ナポレオン時代から続くゲランもまた、極上のバラをふんだんに使用した。バラの成分であるゲラニオールやゲラニン酸は「ゲラン」の初代・フランソワ・パスカル・ゲランにちなんで名づけられたのである。

医師であり化学者だった彼は、ナポレオン3世の皇后ウジェニーのために香水を調合し、のちに世界的な香水・ゲランを創ったのである。ウジェニー皇后は、凜とした貴族的な美貌と抜群のファッションセンスで宮廷をリードし、94歳で亡くなるまで魅力は衰えなかったという。

そして、ゲランの息子である2代目・エメ・ゲランもまた、恋と香りをあわせる天才だった。彼が自分のために調香したという「ジャッキー」は、恋人の香りが24時間たってもなお、まざまざと残る。

フローラルにスパイスやムスクを調合し、匂いの持続時間を飛躍的に延ばしたのである。

甥である3代目のジャック・ゲランは、コティの「シプレ」をもとにゲラン風に作ろうとして失敗に終わったというが「ミツコ」「シャリマー」のような名香を残した。

現在は4代目だが、天然原料への変わらぬこだわりは名門の名に恥じない。香水の一大産業地として世界的に有名な南仏・グラースの最高品種を押さえているのである。

また、フランスの香水を語るときに忘れてならないのは、キャロンの創業者エルネスト・ダルトロフである。

ミモザとクロスグリという当時としては斬新な組み合わせの「ファルネシアーナ」を創作し、公爵夫人の香りとしてフランス社交界を魅了した。

そして、バラの天然香料とオレンジブロッサムを贅沢に使った「ナルシス・ノワール」はキャロンの名を不朽にしたのだ。

社交界といえば、王妃マリー・アントワネットが愛用したウビガン香水店も忘れてはならない。

ウビガンはフランス香水の基礎を築いたひとりである。伝説によれば、フランス革命のとき、ルイ16世とアントワネットは庶民に身をやつして逃亡したのだが、アントワネットは逃亡の途中にウビガン香水店に立ち寄った。

それが仇となり、平民がそんなに極上の香りをまとっているはずがないと身分がばれて逮捕されたという。

フランス人の香水への執着と想像力の源がどこからくるかといえば、豪奢な官能におぼれたフランス宮廷にあったのではないか。

内乱と陰謀が取り巻き、国庫の財政は慢性的に逼迫しているにもかかわらず、歴代の王家の情熱はもっぱら色恋沙汰に向けられていた。

しかし、ここで都合の悪いことが起こる。彼らは滅多に風呂に入らなかったのである。身体を清潔にするという概念は19世紀以降である。

そこまでは王侯貴族であろうと、垢だらけのまま人に接近していた。香水の発達は、耐え難かったのであろうお互いの悪臭をごまかすためだったのである。

そのせいか、フランス人はいまでも清潔すぎる匂いが好きではない。娼家の客も、前の客が寝たであろうシーツに抵抗がないという。

むしろ、自分好みの香水をつけているかどうかのほうが問題なのである。そうした香水フェになると、バラの香りを前面に出したフェミニンな香りは物足りないのである。

バラの香りは官能的でもあるが、どこかに清潔な気品もそなえている。その部分が邪魔なのである。

彼らはより強い刺激にエスカレートしていく。「タブー」とか、「センセーショナル」とか、香水の名前にもその嗜好が現れている。しかし、それでバラの値打ちが下がったわけではない。

バラは前面に押し出されていなくとも、名香といわれる香水には必ずバラの香りが調合される。

「シャネルNo5」は、アルデヒドという化合物を使って大成功した最初の香水である。

天才調香師・エルネスト・ポーがシャネルの依頼を受けて、1921年に創作した。アルデヒドの使用があまりにも衝撃的だったために隠されてしまったが、この香水には高価なジャスミンやバラの天然香料も巧みに配合されているのである。



バラはそれ自体独立した香りを持っているが、他の香りと決して競合しない。むしろ、他の香りを調整したり、ひきたてる役割を担うのである。

それは、花のブーケに似ている。バラは、バラだけのブーケでも華やかで美しい。

単色でもさまざまな色の組み合わせでも、贅沢で趣味のいいそのテイストは変らない。また、ほかのどの花との相性もいい。

逆に、他の花は単一よりもバラが加わったほうがより魅力的になるのだ。たとえば、結婚式に人気のカサブランカも、それだけだと退屈だが、白いバラを組み合わせたら花嫁の清楚さをいっそう引き立てるのではないか。

豪華なランチや、初々しいマーガレット、スタイリッシュなチューリップ、孤独なエリカ、エゴイストなスイセンとだって、バラは仲良くなれる

しかし、バラがなかったらどうだろう。花屋のショーウィンドウが、どれほど色鮮やかで目新しい花々に飾られ、えもいわれぬ芳香が漂っていたとしても、そこに、バラの花がなかったらほかの花が欠けていても誰もその存在に気づかないかもしれない。

しかし、バラがなければ、花店はもう私たちの知る心地よい場所ではなくなってしまう。バラの不在は、花そのものの不在だからだ。

香水も同じである。グラスの最高級ジャスミンだろうと、媚薬のようなイランイランだろうと、同じ重さが金よりも高くて単体だけでは胸の悪くなるような匂いになりかねない。

とはいえ、本物のバラの精油は、1滴を得るのに100個の花びらが必要とされる。世界で最も高価な香料のひとつのゆえんであるが、世界で販売されている「バラの精油」製品は、香料産業が生産している年間量をはるかに上回るといわれている。

また、最近の合成香料はクロマトグラフィーさえもごまかしてしまう巧妙さなのである。

ふつうに販売されているほとんどは、値段も広告も関係なく、純水な天然と思わないほうが無難である。

いずれにしても、庶民とは縁のない世界だといわれるかもしれないが、精油ではなくローズ水なら家庭のキッチンでも十分できるのだ！

バラはそれこそ狭い庭でも鉢植えでも自分で栽培すれば、完全な無農薬栽培でできる。作り方はバラ水200ml作るのにバラの花100個くらいあればすむ。

100個と言うとびっくりするが、100本ではないのである。ひとつの茎に20個の花を咲かせられれば、たったの5本である。

道具は、専用の蒸留器があれば簡単だが、安い陶器のランビキ(江戸時代にポルトガルから伝わったという水蒸気蒸留器で通販で¥3000くらい)か、鍋とどんぶりでも、香りの高い本物のバラ水ができる。

コットンに浸したバラ水で顔全体を覆うと、ふ~っと心落ち着く非常に良い香りに包まれ幸福感な気持ちになってくる。

とくに、気が滅入っているときや、疲労感のあるときなどはバラの鎮静作用を実感すると良い。呼吸が楽になり、いつのまにか若いころの華いだ気持ちが戻ってくるのである。

バラはまがい物が非常に多いので、くれぐれも信頼におけるところからの購入をおすすめする。

ぜひ、本物のバラでアンチエイジングしていただきたいものである。

# バラ(Rose)解説書



定価¥500 (税込¥525)